

イソップにおける「西学東漸」

— 『伊朔譯評』と『意拾喻言』の対比から

喬 昭

“Westward learning” in Aesop
From the comparison of “*YiShuoYiPing*” and “*YiShiYuYan*”

QIAO Zhao

Abstract

In this paper, we consider the acceptance or transformation of Aesop as seen from the comparison between the Chinese translation Aesop, “*YiShuoYiPing*” and “*YiShiYuYan*”, with a view to exploring the process from parables to lessons, and analyze literary expressions that appear in Aesop’s Chinese-style transformation or “Westward learning”. The 1840 Tome edition of “*YiShiYuYan*” is made up of three languages: English, Chinese, or Cantonese, but in this paper we will focus solely on the Chinese part. This paper analyzes the differences between the two from three perspectives. The first is the title of the fable. The second is the content of the parable. The third is a lesson. In the 1840s, when the opposition war was overwhelmed by the tide of “*YiShiYuYan*,” “Impression Words” was published. The book “*YiShuoYiPing*” published in 1909 followed “Wu Hsu Reform (1898)”, and there are many ideas that accept the Western one contained in the original texts, such as the ideological reform or the white talk trend submitted by Liang QiChao. Aesop has spread to the Chinese as an easy-to-read item.

Keywords: イソップ寓話、伊朔譯評、意拾喻言、西学東漸、翻訳

はじめに

寓話はその表層の物語内容の奥に、教訓やメッセージを持っている。『広辞苑』の第七版（岩波書店、2018年）では、寓話は「教訓または諷刺を含めたたとえ話」と説明されている。『イソップ寓話』は、アイソーポス（Aesop 即ちイソップ）¹⁾ が作ったとされる寓話を集めた寓話集である。特に動物、生活雑貨（例えば、瀬戸物と金物など）、自然現象（太陽と風）、様々な人々（旅人など）を主人公にしたものが有名で、イソップ物語・イソップ童話等と呼ばれることもある。寓話といえばイソップ寓話であるとも言われている。ヘロドトス（Herodotus）²⁾ の『歴史』によると、紀元前6世紀にアイソーポスという奴隷がいて、寓話を使いその名声をえたとされている。イソップ寓話は古代ギリシャの物語で、世界中に広く伝播されている。各国の言葉に翻訳され、人々に知られている。本稿では、漢訳イソップに属する『伊朔譯評』と『意拾喻言』の対比から、イソップの受容または変容について考察する。寓話のタイトル、内容から教訓まで研究し、イソップの中国風変容または「西学東漸」に現れる文学表現を分析する。

さて、『伊朔譯評』と『意拾喻言』を対比しながらそれぞれの特徴を考察し、その後、イソップの受容について見てみよう。1840年ロバート・トーム（Robert Thom）³⁾ 版の『意拾喻言』は英語、中国の標準語または広東語三つの言語からなっているが、本稿では中国語の部分を対象とし検討する。本稿は三つの方面から両者の異同を分析する。一つ目は寓話のタイトルである。寓話のタイトルは、内容の要点を非常に短い言葉にまとめ、寓話の最初に置かれる言葉である。よって、タイトルから明瞭にその一話の内容が伝えられる。寓話のタイトルは話に入る前の窓口のような存在だと言えるのではないだろうか。二つ目は寓話の内容である。内容の言語表現、寓話の主人公、さらに翻訳手法の対比から考察する。同じタイトルの寓話が違う内容を表している可能性がある。異なる翻訳者と違う時代によって、異なる訳文が作られることは当然であろう。ここではイソップの変容または受容を反映していると思う。三つ目は教訓である。説話が伝承されるとき、まずは話そのものが伝承され、それに付加される教訓は、その話をどう受

1) アイソーポス（紀元前619年-紀元前564年ごろ）は、古代ギリシャの寓話作家。奴隷だったと伝えられる。日本では英語読みのイソップ（Æsop, Aesop [i:sɒp]）という名でイソップ寓話の作者として知られる。

2) ヘロドトスは、古代ギリシアの歴史家である。歴史という概念の成立過程に大きな影響を残していることから、歴史学および史学史において非常に重要な人物の1人とされ、しばしば「歴史の父」とも呼ばれる。彼が記した『歴史』は、完本として現存している古典古代の歴史書の中では最古のものであり、ギリシアのみならずバビロニア、エジプト、アナトリア、クリミア、ペルシアなどの古代史研究における基本史料の1つである。

3) ロバート・トーム、またトム（英：Robert Thom、中：羅伯聃、1807年8月10日-1846年9月14日）はイギリスの外交官、中国語研究者。『イソップ物語』の英中対訳本『意拾喻言』を著し、1840年に *Canton Press* から出版された。『意拾喻言』の中国語には南京官話と広東語とで発音が示されていた。また、中国の文化に沿うように翻案されており、中国人の衣装を身にまとったイソップと評された。

け止めるかによって変化すると言えるのではないだろうか。つまり、その国や地方、また伝わった時代の生活習慣等様々な影響を受けて、教訓は変化し得ると言えるのではないだろうか⁴⁾。

一 イソップ寓話について

現在言及している『イソップ寓話』は、アイソーポス(イソップ)が作ったとされる寓話を集めたとされる寓話集である。中国では、最初のイソップ訳版は1625年にベルギー人ニコラ・トリゴー(Nicolas Trigault)⁵⁾が口述したものの『況義』である。この『況義』は22章があり、パリ国立図書館に収集されている。この後、主に、1837年に広州で出版された『意拾蒙引』(1840年で再版された)、1840年にロバート・トームの『意拾諭言』、1903年に林紘が訳した『伊索寓言』である。更に、近代になってから、多くの中国人の手によるイソップ訳版が現れた。現在のイソップ寓話集と呼ばれるものには、アイソーポスのものだけでなく、それ以前から伝承されてきた古代メソポタミアのもの、後世の寓話、アイソーポスの出身地とされる民話を基にしたものも含まれている。ギリシャ語の原典があったのかは不明で、現存するのは後世に編集された寓話集である。現在、寓話についている解釈は、これらの古典的寓話集が、ギリシャ語やラテン語を読むキリスト教の学者によって受継がれて来た事、または中世ヨーロッパでのキリスト教の価値観を持った寓話をさらに含むことで、単なる娯楽的な寓話から教訓や道徳をしめす教育的な意味を付加されている。

1. 陳春生訳『伊朔譯評』について

本稿に論じている『伊朔譯評』は宣統元年(1909年)上海協和書局が出版され、全部で三つの序文と199話の説話からなっているものである。『意拾諭言』はロバート・トームがイソップの英語版から中国語に翻訳したものである。漢訳イソップの研究分野で『意拾諭言』についての研究は多い。『意拾諭言』に比べると、一つ大きな違いは『伊朔譯評』が中国人の手によるイソップだということである。

訳者の陳春生は「知白子」と自称する。老子の言葉には「知其白、守其黒、爲天下式」という説があり、白(輝き)を意識し、なお黒(暗さ)を保つその人は、天下の範となると訳している。それは、「知白」が「清廉潔白を知る」こと、「守黒」が「世の中に交わる」ことを意味している。世間の汚濁や誘惑にあっても、清廉さを保つ中に徳が増していくと言う事である。

4) 濱田幸子「説話と教訓の伝承—『伊曾保物語』『男、二女を持つ事』と『三國伝記』『二人のつまに、髪を抜かれし事』—」(佛教大学大学院紀要 文学研究科篇 第四十一号)、99頁。

5) ニコラ・トリゴー(Nicolas Trigault, 1577年3月3日-1628年11月14日。中国名:金尼閣(きんにかく))は北フランス(当時はスペイン領ネーデルラント)のドゥエー出身のイエズス会士。神父。中国(明)の南京、杭州、北京等で宣教師として活動し、当時の中国語(南京官話)をローマ字で記録したことで、後の音韻学に多大な貢献をした。

白を知りて、黒を守る、雄を知りて、雌を守る。何かを成すにあたり、その一点だけではなく客観的に、全体的に視点を置き、事に処せよ、という事だろうか。ただ、「知白守黒」、「知白守墨」は、書法においても、文字、余白のバランスの良否を言う大事な概念として捉えられている。すなわち、バランスは大事である。『伊朔譯評』の教訓において、各話の後ろに「知白子曰」の冒頭で始め、評論または教訓が表示される。そして、書物だけではなく、陳は映画分野でも「知白子」という名前を使う。映画台本の編集者として、1924年3月に上映された『大義滅親』のメインクリエイターリストの中にも「知白子編」⁶⁾と書いてあった。陳は「知白子」の名で異なる分野に活躍していた。

2. イソップに関する翻訳

キリスト教の宣教物であるイソップ寓話は様々な様式があり、まず「イソップ」に関する翻訳から述べよう。「イソップ」はギリシャ語「Aesop」から訳されたものである。中国語の場合は「伊索 (Yi Suo)」、「伊朔 (Yi Shuo)」、「意拾 (Yi Shi)」などに訳されていた。その代表的な翻訳はトム訳の『意拾諭言』、林紘訳の『伊索寓言』、そして陳春生の『伊朔譯評』または『東方伊朔』⁷⁾であろう。「Fable」はラテン語の「fabula」に由来し、植物や動物など、擬人化された自然の力を扱う短編や民話（人間の本質を考えるもの）である。陳春生の『伊朔譯評』については研究の先行文献はまだないため、周辺の資料と作者の陳についての考察から始め、今後の研究を行う予定である。漢訳イソップの一部となる『伊朔譯評』を研究する上でイソップにおける「西学東漸」に対して、多少とも研究価値があると思う。当時代における活躍していた文学分野の活動や時代背景を通じ、文字を介して思想を表すイソップ寓話を検討する。

本稿ではトムの翻訳と対比し、イソップの中国風変容を考察したい。翻訳は文化の交渉を反映しており、異なる言語の形でその民族性または国情を表す。文化接触の三契機は「個性」、「文化」、そして「状況」である⁸⁾。当時、宣教師たちが中国にもたらしたものといえば、直ちに思い起こされるのは「バイブル」とヨーロッパの近代科学文明であろう。しかしそれと同時に忘れてならないものが「イソップ物語」である。バイブルにせよ、イソップにせよ、中国人にそれを伝達するには当然に「翻訳」という営為が必要になる。さて、翻訳となるとそこには当然「翻訳観」が問題となる⁹⁾。寓話の目的は当時の言語的な方法とデータを通じて現実を理解する事である。また、語り手は思想や感情を表現するための素晴らしい方法である詩を用いている。そして、寓話と詩というその言語的な形式は共存している。さらに、それらは表現や理解

6) 黄德泉『当代电影』（中国电影艺术研究中心 100082号）、61頁。

7) 陳春生『東方伊朔 別称『諭道瑣言』（上海美華書館發行、1906年）、中国古代の有名話や民話などを寓話の形で教訓を与える。

8) 前坊洋「イソップ 東アジアへ」（近代日本研究 Vol.6、1989年）、69頁。

9) 内田慶市『近代における東西言語文化接触の研究』（関西大学東西学術研究所研究叢刊、2001年）、まえがき。

などの方法であり、それらの表面の簡潔さのおかげで聴衆はそれらの意味を理解できる。そのため、寓話の基本的な目的は寓話を語る人によって認識された現実の解釈である。

二 寓話のタイトルについて

寓話のタイトルは内容を非常に短い言葉にまとめ、寓話の最初に置かれる言葉である。よって、タイトルに明瞭にその一話の内容が紹介されている。寓話のタイトルは話に入る前の窓口のような存在だと言えるのではないだろうか。では、『伊朔譯評』と『意拾喻言』のタイトルについて分析しよう。

1. タイトルの特徴

まず、『伊朔譯評』には199話があり、そのタイトルは全部四文字言葉からなっている。これは最も顕著な特徴である。これに対して、『意拾喻言』のタイトルは違い、全部で82話がある。二文字から五文字までのタイトルからなっているが、その中では四文字タイトルが多数を占めている。

表 1

『伊朔譯評』	『意拾喻言』	
蠅死蜜甌	二鼠	亀兔
狼坐羊罪	豺烹羊	報恩鼠
獅熊争食	鷄公珍珠	老人悔死
獅驢分獵	鷹貓豬同居	馬思報鹿仇

表1のように、『伊朔譯評』は全部四文字のタイトルからなっている。『意拾喻言』には「二鼠」、や「亀兔」のような二文字のタイトルは6話がある。三文字のタイトルは「豺烹羊」、「報恩鼠」、「鹿照水」の3話がある。そして、「鷹貓豬同居」、「馬思報鹿仇」のような五文字のタイトルは5話がある。その以外は全部「鷄公珍珠」、「老人悔死」のような四文字のタイトルで、総計68話がある。タイトルの文字数から見れば、四文字が代表的な特徴となっている。『意拾喻言』のタイトルは異なる文字数からなっているが、一番多い形はやはり『伊朔譯評』と同じく四文字タイトルである。一方、文字数の違いだけでなく、タイトルから見る寓話の内容は同じかどうかについて検討したい。では、タイトルの内容を対比してまとめる。

2. タイトルの異同に関する分析

タイトルの違いから内容を対比する方法とえば、まずタイトルの異同を分析しよう。同じ

タイトルと類似のタイトルを二種類に分けて整理した。以下「ア」と「イ」のデータにまとめた。

ア、同じタイトル

『伊朔譯評』	『意拾喻言』
3 ¹⁰⁾ , 獅熊爭食	3 ¹¹⁾ , 獅熊爭食
5, 鷺生金蛋	4, 鷺生金蛋
10, 獅駟爭氣	10, 獅駟爭氣
14, 狼受犬騙	12, 狼受犬騙
16, 鴉插假毛	14, 鴉插假毛
28, 四肢反叛	26, 四肢反叛
36, 鷹鶴同網	36, 鷹鶴同網
37, 鴉效鷹能	37, 鴉效鷹能
39, 獵主責犬	40, 獵主責犬
40, 戰馬欺駟	41, 戰馬欺駟
41, 大山懷孕	39, 大山懷孕
42, 眇鹿失計	32, 眇鹿失計
46, 鼠妨貓害	77, 鼠妨貓害
48, 牧童說謊	75, 牧童說謊
49, 候君狐臣	74, 候君狐臣
50, 野猪自護	73, 野猪自護
54, 杉葦剛柔	70, 杉葦剛柔
56, 鴉欺羊善	68, 鴉欺羊善
57, 指頭露奸	67, 指頭露奸
58, 縦子自害	66, 縦子自害
62, 狼斷羊案	63, 狼斷羊案
63, 義犬吠盜	57, 義犬吠盜
64, 鳥悞靠魚	58, 鳥悞靠魚
65, 驢馬同途	59, 驢馬同途
66, 狼計不行	62, 狼計不行
71, 羊與狼盟	49, 羊與狼盟
74, 鷄勺蛇蛋	43, 鷄抱蛇蛋
75, 斧頭求柄	60, 斧頭求柄
76, 鹿求牛救	51, 鹿求牛救
77, 農夫遣訓	54, 農夫遣訓
86, 老蟹訓子	80, 老蟹訓子
97, 鰕鱸皆亡	79, 鰕鱸皆亡

10) 『伊朔譯評』のタイトルに表記している数字の番号はデータ整理のために作った順番である。原文は番号がついていない。

11) 『意拾喻言』原文の番号はいくつかのミスがある。全部は81までと表示しているが、実は82話がある。表記している番号の間違いは表を持って記入した。

イ、類似のタイトル

『伊朔譯評』	『意拾喻言』
2, 狼坐羊罪	1, 豺烹羊
4, 獅駢分獵	6, 獅駢同獵
6, 貪狗捕影	5, 犬影
8, 田夫救蛇	9, 農夫救蛇
9, 馴鶴救狼	7, 豺求白雀
11, 鷄得珍珠	2, 鷄公珍珠
12, 城鄉二鼠	8, 二鼠
15, 駢蒙獅皮	13, 駢穿獅皮
18, 熊搗蜂窠	22, (実は24) 蜂針熊人
25, 蝦蟆學牛	21, 蛤蝻水牛
26, 鷹豬受愚	22, 鷹貓豬同居
27, 馬報鹿仇	23, 馬思報鹿仇
29, 狐欺山羊	31, 狐與山羊
30, 瓦鐵二缸	30, 瓦鉄缸同行
31, 狡狐騙鴨	27, 鴉狐
32, 老人怕死	34, 老人悔死
34, 齊人難爲	35, 齊人妻妾
38, 財神無靈	33, 愚夫求財
43, 鹿照溪水	42, 鹿照水
44, 鼓手委過	44, 鼓手辯理
45, 毒蛇咬鎚	48, 毒蛇咬錘
47, 人獅爭長	76, 人獅理論
67, 車夫求神	56, 車夫求佛
68, 肥犬瘦狼	61, 馴犬野狼
69, 狐鶴之交	55, 狐鶴相交
70, 日風相賽	53, 日風相賭
73, 小鼠報恩	46, 報恩鼠
78, 鹿進獅洞	52, 鹿入獅穴
79, 龜兔賽跑	16, 龜兔
85, 星家露醜	78, 星者自悞
88, 獵者贈兔	25, 獵戶逐兔
102, 狐罵葡萄	19, 狐指罵葡萄
103, 兩鷄相鬥	17, 鷄鬥
154, 以驢待馬	59, 驢馬同途
161, 駢自尊大	60, (実は50) 駢不自量

以上「ア」と「イ」のデータにより、同じタイトルは合計32話がある。類似のタイトルは全部で35話がある。「同じタイトル」は全く同じ名前に表す。例えば、データ「ア」にまとめた『伊朔譯評』の「5, 鷺生金蛋」と『意拾喻言』の「4, 鷺生金蛋」である。「類似のタイトル」は、

それぞれ言語の表記によって判断する。例えば、データ「イ」にまとめた『伊朔譯評』の「2, 狼坐羊罪」と『意拾喻言』の「1, 豺烹羊」である。言語の表記は違うが表した意味が同じである。そして、『伊朔譯評』の「70, 日風相賽」と『意拾喻言』の「53, 日風相賭」のように、「賽」と「賭」以外は同じ言語であり、これは「類似のタイトル」に属する。翻訳文として、「賽」と「賭」の一文字の違いで両者は同じではなく、類似に分けられていることは特徴である。読者にとって、訳者による異なる訳文で異なる体験ができる。データにより、82話からなる『意拾喻言』のなかで『伊朔譯評』と同じ、そして類似のタイトルは合計67話の数に達している。かくして、『伊朔譯評』は『意拾喻言』と繋がりがあり、あるいは『伊朔譯評』は『意拾喻言』を踏襲した可能性があると思われる。

要するに、この部分では『伊朔譯評』と『意拾喻言』のタイトルについて、以下の特徴をまとめることができる。

①、『伊朔譯評』は全部整然となる四文字タイトルであり、『意拾喻言』は二文字タイトルから五文字タイトルからなる。

②、イソップ寓話の特徴として、『伊朔譯評』と『意拾喻言』のタイトルの中には、動物談の特徴が示されている。擬人の描写手法で動物を比喻体にする話からなっている。いわゆる原作に基づく翻訳思想である。

③、全く同じタイトルと類似のタイトルは数多い。そこで、『伊朔譯評』は『意拾喻言』を参照した可能性が高いと考えられる。

三 イソップにおける「西学東漸」

寓話のタイトルが同じでも内容が違う可能性がある。そして、訳者が違う場合、訳文は必ずしも一致しない。翻訳は単なる文字の変更作業ではなく、その過程には異文化コミュニケーションが表現されている。文字の意味に集中する翻訳は異なる言葉で表す記号のようでありつつも、異文化を理解した上でふさわしい言葉に翻訳する事はすなわち「翻訳」の真意ではないだろうか。本稿では、異なるイソップ翻訳版の内容と教訓を対比し、イソップにおける「西学東漸」を研究する。

1. 同じタイトルに関する内容の対比

前文で分析したデータの中から、全く同じタイトルの「獅熊争食」を例として挙げよう。

獅熊争食

有獅與熊。同得了一隻小羊。但獅與熊。在走獸中。凶暴猛烈。皆是自居魁首。当分食這小羊的時候。兩下也是自居首功。爭多論少。各不相讓。以致爭鬪起來。後來兩下皆是爭得

血飛肉薄。精疲力竭。暈在地上。一點也不能移動。這時却來了一隻狐狸。將小羊拖去。並對獅與熊說道。多謝二公之力。小的殊不敢當。只得容後圖報了。獅與熊。也只得面面相對。眼睁睁望著牠拖去。並互相懊悔說。與其爭。鬪。到。這。種。地。步。一無。所。得。何如。早。點。公。公。道。道。的。對。分。呢。

知白子曰。世人合同作事。總要公公道道。彼此無欺纔能。有益無害。若是你要占我得便宜。我要占你的便宜。彼此相欺。各不相讓。以致涉起訟來。經年累月。糾纏不已。使得差役從中發財。兩下皆是傾家蕩產。毫無所得。豈不是愚之極嗎。俗說。鷸蚌相持。漁人得利。這話真正不錯了。

— 『伊朔譯評』

獅熊爭食

山海經載獅子與人熊同爭一小羊，二物皆猛獸，各逞其雄，勁敵終日，卒之彼此皆受重傷，甚至各不能起，適來一餓狐，見二獸皆惫，順手而得之，日多費二公之力，揚揚而去，二獸眼睁睁無以爲法，任其取去，悔之曰，何不割而分之，強如受此欺侮之氣，俗云，鷸蚌相纏，漁人得利，是也。

— 『意拾喻言』

このように、タイトルが同じだから、全く同じ寓話に見られる。そして、内容の表現は多少とも異なるが、文脈または読者に伝えたい意味は同じである。同じタイトルの内容は同じなのが当然であろう。しかし、詳しく分析すると、『伊朔譯評』は「有獅與熊」から始める。それに対して『意拾喻言』は「山海經載」から始める。『意拾喻言』のなかで「山海經載」のような冒頭から始める物語は多い。「山海經」などの言葉を見れば中国のイメージを強く与えられる。そして、トム訳の『意拾喻言』は宣教師たちと西欧人たちが中国語を勉強するために作ったものである。中国の古典や特有なものを介して、翻訳に新鮮なイメージを与える。いわゆる文化にふさわしい翻訳手法だろう。一方、『伊朔譯評』は中国人のために中国人が訳したものである。作品の読者層または対象が違うため、同じ物語であっても言語表現の面でいくつかの違いが現れている。『伊朔譯評』の例とする「獅熊爭食」では「各不相讓」、「精疲力竭」、「面面相對」のような四字熟語がたくさん使われている。四字熟語の活用はもう一つの翻訳手法であろう。これは『伊朔譯評』の独特な特徴ではないだろうか。

「獅熊爭食」の他に、『伊朔譯評』における「一隻小羊（一匹の子供の羊）」と「一隻狐狸（一匹の狐）」のような量詞の使い方を重視するところが多い。そして、最後の教訓は「俗說。鷸蚌相持。漁人得利。這話真正不錯了。」と「俗云，鷸蚌相纏，漁人得利，是也，」の内容であるが、俗語の活用は同じもので、その「不錯了」と「是也」は文体の違いを反映する。『意拾喻言』はイソップを研究する分野に有益な情報を与えた。しかし、翻訳における文化、言語研究の面から見ると、『伊朔譯評』はいわゆる言語的な中国風イソップと言えらる。四字熟語、または

量詞の活用、そして、主人公の感情に関する描写などに細かく反映している。西欧の作品を理解した上で、自国の文学表現で翻訳することは「西学東漸」を反映するものである。

寓話とは物語の内容が何らかの教訓やメッセージを持った文学である。主人公の感情や物語の背景を描写する場合、文学的翻訳観とはいわゆる「異文化を自らで体験する」ことであろう。特に、量詞の使用は以前のインソップ翻訳にほとんどはない。「一位」、「一隻」、「一條」などの言語表現は文字を生き活きとさせている。まるで物語が目の前にあるようである。そこで、読者が寓話を読む際、自己体験を深く感じられる。さらに、『伊朔譯評』では主人公についての描写は鮮やかで具体的である。

「這鵝的腹中必然有蛋甚多。與其每日等他一個一個的生下。何如將他的肚腹破開。將蛋一律倒出。豈不是立刻我就成了個大財主嗎。打算停擋。使用刀將這鵝的肚腹破開。查內中却是一無所有。」
— 伊・鵝生金蛋

「吾視其腹便便、其中不知何許、宰而取之當得大富、遂殺之、剖其腹一無所有。正所謂貪心不得本利俱失是也」
— 意・鵝生金蛋

「羊聽見這話。乃好好地回答道。你姥爺飲水是在上流。小的是在下流。豈有攪渾老爺飲水的道理。」
— 伊・狼坐羊罪

「羊對曰。大王在上流。羊在下流。雖濁無碍。」
— 意・豺烹羊

『伊朔譯評』の「鵝生金蛋」にある「豈不是立刻我就成了個大財主嗎。打算停擋。」と「你姥爺飲水是在上流。小的是在下流。」などは主人公の感情や本音を鮮やかに展示していた。それに対して、『意拾喻言』の「鵝生金蛋」は事情を記述することを中心になる。そして、『伊朔譯評』では、「姥爺」という尊敬の後ろに「小的」を反響する。このような人物呼称を通じて、上下関係を代表する。「伊・狼坐羊罪」の「豈有攪渾老爺飲水的道理。」と「意・豺烹羊」の「雖濁無碍」も明らかな対比となっている。反問の気持ちと事情の記述は異なる体験が感じられる。さらに、『伊朔譯評』では「田鷄求饒」の「眾位小老爺」、「獅熊爭食」の「小的殊不敢當」のような代名詞は頻繁に出てくる。『意拾喻言』の内容は簡潔な表現と言うなら、『伊朔譯評』は鮮やかで具体的な描写手法が特徴と言える。

2. 異なるタイトルに関する内容の対比

寓話の内容を詳しく分析したところ、寓話のタイトルは違うが、内容は同じものはいくつかある。以下「ウ」のデータにまとめた。

ウ、違うタイトル(対象と表現が違う、内容が同じもの)

『伊朔譯評』	『意拾喻言』
7, 田雞求饒	20, 孩子打蛤
13, 獅蜂比藝	11, 獅蚊比藝
17, 烏龜求高	15, 鷹龜
33, 漂匠生妒	29, 洗染布各業
51, 審問術士	72, 意拾勸世
52, 猫變美人(猫書生)	64, 愚夫痴愛(愚夫 嫦娥 猫)
53, 大言不慚	71, 荒唐受駁
55, 富人心貪	69, 業主貪心
72, 妒驢取辱	45, 驢犬妬寵
110, 借地生狗	18, 黑白狗螻
180, 鷄與鷄鬪(鶴鷄)	65, 鷄鵠同飼

データ「ウ」にまとめた合計11話の寓話は、タイトルから見ると違う話かもしれないが、表す内容は同じである。例えば、『伊朔譯評』の「7, 田雞求饒」と『意拾喻言』の「20, 孩子打蛤」は登場した主人公は同じ「カエル」、「子供」であってもタイトルの表記は異なっている。『伊朔譯評』はタイトルに「カエル」を主体とし、『意拾喻言』は「子供」と「カエル」の両方を主体とする。そして、寓話の具体的な内容は同じである。他にも『伊朔譯評』の「52, 猫變美人」と『意拾喻言』の「64, 愚夫痴愛」を見てみよう。

猫變美人

有一猫。生得極為好看。但自知終是居在畜生道中。頗不足意。所以日日來禱天神。賜他變為美人。一日天公果然聽了他的祈禱。賜他變為美人的身體。如花似玉。無人不愛。後乃配了一位書生為妻。你歡我愛。伉儷情深。某夜偶有一隻老鼠。在他房中經過。美女一聞老鼠的氣味。立即化身為貓。往捕那鼠。書生幾乎嚇死。天神當知這事。便罰他永遠為貓。不許再變為人。因為他已了成人身。不該仍有畜牲的情性也。

知白子曰。世上有等人。生性本來不善。又恐有了惡名。被人輕看。所以處處假裝好人。欺騙當世。但稍遇錢財細故。他那貪鄙齷齪的性情。即時便要顯露。俗說。偷嘴的貓兒性不改。信然。

— 『伊朔譯評』

愚夫痴愛

昔有愚夫。家畜一貓。視如珍寶。常祝於月裡嫦娥曰。安得嫦娥將我家貓兒。換去形骸。變一美人。是余之所願也。由是夜夜祈禱。嫦娥感其癡誠。姑將其貓。暫變美人。愚夫見之。喜可知也。於是寵幸如夫妻焉。一夜同臥帳中。嫦娥以鼠放入房內。美人聞鼠氣疾起而擒之。嫦娥責之曰。吾既托爾為人。自當遵行人事。何以復行獸性。遂復仍變為貓。如世人貪狡之

徒、雖則暫行正道、一時財帛觸目、自然露出真形、俗云、青山易改、品性難移、正此謂也。
— 『意拾喻言』

「猫變美人」で登場した主人公は「猫」と「学者」であり、「愚夫痴愛」の主人公はそれぞれ「愚かな人」と「嫦娥」¹²⁾、そして「猫」である。登場した主人公は違っても、寓話の粗筋は同じである。そして、「猫變美人」では変身を願った者は「猫」であり、「愚夫痴愛」では変身を願った者は「愚かな人」である。寓話の経緯は同じ「ネズミの誘惑で変身した美人の体から猫の身に戻った」ことである。しかし、願い主は違うが、結果は同じであっても、寓話の中から違う道理が得られる。「世上有等人。生性本來不善。又恐有了惡名。被人輕看。所以處處假裝好人。欺騙當世。但稍遇錢財細故。他那貪鄙齷齪的性情。即時便要顯露」と「如世人貪狡之徒、雖則暫行正道、一時財帛觸目、自然露出真形。」は全く同じ意味である。が、後ろの教訓「俗説。偷嘴的貓兒性不改。信然。」と「俗云、青山易改、品性難移、正此謂也。」は「性格は生まれつきのものだ」という意味である。しかし、教訓では主語が違うことを反映している。猫の視点から「猫がネズミを食べる性格を変えさない。」が、飼い主の視点から見れば、「猫は性格を変えさないものだ」とそれぞれが違う表現で教訓を書いてある。

3. 教訓における「西学東漸」

寓話とは、比喩によって人間の生活に馴染みの深いできごとを見せ、それによって諭すことを意図した物語である。名指しされることのない、つまりは名無しの登場者は、動物、静物、自然現象など様々だが、必ず擬人化されている。主人公が、もしくは主人公と敵対者が、ある結果を引き起こし、ある出来事に遭遇する始末を表現する本筋は、なぞなぞと同様な文学的構造を持ち、面白く、不可解な印象を与えることによって読者の興味をひき、解釈の方向を道徳的な訓話に向ける特性を持つ。民話によく見られるように、物語の語り末には、寓意的な解釈を付け加えることが習慣的に行われてきた。とはいえ、説話が伝承するとき、まずは話そのものが伝承し、それに付加される教訓は、その話をどう受け止めるかによって変化すると言えるのではないだろうか。つまり、その国や地方、また伝わった時代の生活習慣など様々な影響を受けて、教訓は変化し得ると言えるのではないだろうか。寓話の教訓から読者に道を説く目的だけでなく、その教訓が反映している時代背景と文化体験なども重要であると思う。

「罌罌子¹³⁾曰。世上有等人。専門聳人作惡。且又自己不肯居惡人之名。每到受報時。便諉為

12) 嫦娥(じょうが、こうが)は、中国神話に登場する人物。后羿の妻。古くは姮娥(こうが)と表記された。

13) 『大辞林』(三省堂 第三版、2006年)。「罌罌」というのがやかましいさま。さわがしいさまである。「罌罌子」に関して、『罌罌子歴鏡』という本があり、清代の胡袞と清方江が編集した本である。この『罌罌子歴鏡』は天文アルゴリズム系についての書類である。内容としては「歴元」、「太陽購用」、「日時説」、「中

無罪。殊不知被聳行惡の人。不過一時直性。受人愚惑。那種種惡蹟。皆是那假善人主謀出來。可知聳人作惡の人。真真陰險萬狀之梟雄了。所以。孔子作春秋一書。於為臣的不肯放寬趙盾。於為子的不肯放寬許止。皆說他是弑君弑父。就是這宗誅心之法了。俗說。借刀殺人。真可為鼓手引證。」

— 伊・鼓手委過

「如世人欲籌謀一事，先以危險自慮不敢親身力為又反聳動他人試其利害，自己倒得觀望，如鼓手之殺人，該得非刑無赦也」

— 意・鼓手辯理

「知白子曰。大概人在世界。上自皇帝。下及士庶。無論何等人。皆是各有各的職任。所以能成功一個國度。若是只有皇帝。沒有士庶。那一切農工商賣。誰去經營。若是只有士庶。沒有皇帝。那一切百官庶政。誰去主理。孟子說。無君子莫治野人。無野人莫養君子。信然。」

— 伊・四肢反叛

「如世人不服官府着此也，書云，無君子莫治野人，無野人莫養君子，即此之謂也，又云，禍起蕭牆，豈不惜哉。」

— 意・四肢反叛

「聖經上說。不可將珍寶丟給豬狗。就是此意。」

— 伊・雞得珍珠

「俗云、何以為寶、合用則貴是也、」

— 意・雞公珍珠

以上の例のように、『伊朔譯評』の教訓には、「中国・国家・中国人・華人・中国政府」のような語彙と「孔子・老子・孟子・孫子・詩經・大學」のような語彙がある。そして、「古人」、「皇帝・帝王」、「官府・衙門」のような語彙も出てくる。これに対して、『伊朔譯評』に他の寓話「法庭巢燕」、「牛為鼠窟」、「鳩鴿見逐」の教訓には「耶穌・聖經・上帝・救世主」、「美国」、「西人」のような中国風ではない語彙がある。それぞれの語彙を使用し、教訓で独特な評論を書き、そして時代性がある言葉を用いている。さて、『伊朔譯評』の教訓に最も顕著な特徴はイソップを中国風に変容するところである。教訓の中には中国の国情を利用して、読者に道を説明する。それから、儒教思想が大きな割合を占め、孔子、老子方の思想を用い、民衆がよく知っていることを通じて、通俗性が濃厚なように思われる。一方、「耶穌・聖經・上帝・救世主」などの語彙はキリスト教的性格を生かしている。例えば、「伊・雞得珍珠」の「不可將珍寶丟給豬狗」は『馬太福音』第七章の第六条「Do not give dogs what is sacred; do not throw your pearls to pigs. If you do, they may trample them under their feet, and turn and tear you to pieces.」を引用した。そのほかに時代性がある教案や「官府」、「衙門」などの語彙を含む教訓は『伊朔譯評』の翻訳における時代性が現れている。訳者は婦人と子供にもわかり易く読めるというところから当時代の話借りた。さらに、例の「四肢反叛」とは違い、『伊朔譯評』と『意拾喻言』における同じタイトルの寓話でも、異なる教訓を示す場合がある。教訓は作者の思想や伝えたい気持ちを含めるものである。時代背景と訳者の違いで教訓が違うことがある。

星」といった部分からなっている。

「知白子曰。人生在世。説話總要有信。倘若無信。後來他無論説甚麼話。人皆不能取信。這樣如何與人交往呢。孔子説。人而無信。不知其可也。大車無輓。小車無軌。其何以行之哉。可知人而無信。便是自己欺自己。」

— 伊・牧童説謊

「勸世人不可説謊，有真事則當誤矣。」

— 意・牧童説謊

これらの例の「牧童説謊」は現在においても、老若男女を問わずによく知られている「狼來了 (Lang Lai Le)」という話である。子供のころから、よく耳に挟んでくる有名な物語として存在している。さらに、教科書の中にも導入された。しかし、これほど有名な寓話はいったいどういう意味だろう。この寓話から人々に何を伝えたいかは、一致する答えはないと思われる。『伊朔譯評』の「人而無信。便是自己欺自己」(信仰がない人は自分を欺くのと同じ。)と『意拾諭言』の「不可説謊，有真事則當誤矣」(嘘をついたら物事を遅らせる。)はどちらも正しいと言える。それぞれ「—は自分に悪いこと」と「—は事情に悪いこと」を中心となる。とはいえ、嘘をつくことは悪いという意味は同じである。翻訳者は自分なりの文学手法を通じ、イソップ寓話に新しい教訓を与える。翻訳の特徴として、このようにタイトルが完全に同じ、教訓は異なる表現である場合は他の翻訳版にもある。

一方、『意拾諭言』の教訓は、古典を利用することが特徴である。「俗云」、「如世人」のような言葉が教訓で頻繁に使われている。「俗云(中略)是也」、「俗云(中略)也」などの文型になっている。そして、NO.24「蜂針人熊」の「論語云」も出てきた。続いて「書云」、「孟子云」、「諺云」などがある。NO.49「羊與狼盟」は「官府」を使っている。ところが、「所以主耶穌不要邪魔作見證。就是此意。—伊・漂匠生妒」と「孟子云、矢人惟恐不傷人、函人惟恐傷人、又何怪乎、—意・洗染布各業」を対比すれば、「耶穌」と「孟子」の引用で西欧と中国の違いを示していることがわかる。『伊朔譯評』には中国風的なものとキリスト教的な言葉を共用することがあり、それに対して、『意拾諭言』はイソップを全く中国風に変容し、内容も中国のものを引用している。時代の変化とともに、『伊朔譯評』は「中西合璧」の思想を表現している。中国人がよく知っているものと西欧から伝播されたものを同時に紹介することで、異文化の交流を文学作品にて行う。教訓上の東西における交流、そして「西学東漸」の思想を鮮明に表現しているといえよう。

さて、データ分析の結果、データ「ウ」の「51, 審問術士」と「72, 意拾勸世」では、「加拉巴國(中略)伊朔從那裏經過」、「加刺巴三千年前(中略)意拾遇而問之曰」のように、「伊朔」と「意拾」の人名があることに気づいた。これは寓話集の名前『伊朔譯評』と『意拾諭言』の違いで「イソップ」をそれぞれ「伊朔」と「意拾」に訳したのかと考えられる。各自の言葉で名づけたが、同じ内容の話である。寓話の内容は、「イソップ」が旅をしていた時、当時の状況を見て、人に道理を説く話である。他の漢訳イソップにはデータ「ウ」の「51, 審問術士」と「72, 意拾勸世」と同じ内容はいくつかある。しかし、「審問術士」と「意拾勸世」のような物語が、

『イソップ寓話』の原文にあるかについてはまだ確認できていない。そこで、陳訳の『伊朔譯評』より前に、同じ内容がある漢訳版(イソップの旅経験の話がある訳版)を表2に整理した。

表2

「イソップの旅経験」がある訳版	
『意拾蒙引』1839?	「意拾勸世」
『意拾喻言』1840	「意拾勸世」
『伊娑菩喻言』香港英華書院1868	「伊娑菩勸世」
『伊娑菩喻言』上海施醫院1885?	「伊娑菩勸世」
『伊娑菩喻言』香港文裕堂活版1893	「伊娑菩勸世」
『漢譯伊蘇普譚』1876	「伊蘇普勸世」
『漢譯批評伊蘇普物語—名伊娑菩喻言』1898	「伊娑菩勸世」
『伊朔譯評』1909	「審問術士」

「イソップの旅経験」がある訳版は全部で8つある。そして、各物語のタイトルは類似しているが、表2のように、訳版の名前により物語のタイトルは違っている。したがって、特徴は『伊朔譯評』を除き、全部『意拾喻言』系統¹⁴⁾に属するものとなっている。よって、第二章の分析により、『伊朔譯評』と『意拾喻言』には完全に同じタイトルが多い。そして、『意拾喻言』系統にある「イソップの旅経験」物語が『伊朔譯評』の中にもあった点から、『伊朔譯評』は『意拾喻言』系統に属すると推測できる。このことをふまえて、今後の研究でさらに検討する必要があると思われる。

おわりに

本稿は三つの方面から『伊朔譯評』と『意拾喻言』を対比し、イソップ寓話の変容またはイソップにおける「西学東漸」を研究した。外国人が翻訳した『意拾喻言』と中国人の手による『伊朔譯評』を対比し、それぞれの特徴をまとめた。文体の面では、『意拾喻言』は文言と広東話を使っている。『伊朔譯評』の序文である「潤洲陳君春生。譯以官話。非善作。何加以評語。非善解。何言詞意。」¹⁵⁾のように、『伊朔譯評』は官話、白話の文体である。寓話の長さから見ると、『伊朔譯評』はより長く、描写的な文学表現をとっている。これに対して『意拾喻言』は文言を特徴とし、文章の簡潔性を表現している。さらに、時代の変化とともに文化を受け入れる程度は変化する。1840年にアヘン戦争で「西学東漸」の風潮が盛り上がった時代に『意拾喻言』は出版された。西洋のものを東洋に受け入れ、西洋を勉強する思想が始まっていた。当時の文

14) 内田慶市『漢訳イソップ集』(ユニウス、関西大学東アジア文化研究センター、2014年)、91-397頁。

15) 陳春生『伊朔譯評序』(上海協和書局 1909年即ち宣統元年)、1頁。

学分野では儒学がメインポジションである。このような文化背景で中国思想または中国の神話を引用する表現は読者にとって理解しやすいものである。一方、外国人が中国語を勉強する目的で、訳文で中国のものを紹介し、言語勉強にも便利だろう。そして、1909年で出版した『伊朔譯評』は「戊戌変法¹⁶⁾」以降のものとして、思想改革または梁启超¹⁷⁾が提出した「変古語之文學、為俗語之文學」の白話風潮が始まり、西欧のものを受け入れる思想も多い。『イソップ寓話』は中国民衆に簡単に読めるものとして広がっていった。翻訳は科学や芸術であるだけではなく、思想や感情を交換するための語用論的なツールでもある。翻訳の重要性、異なる文化を持っている民族の間の接触と交流によって高められてきた。言語の障壁以外にも文化の相違があるため、東洋と西洋のコミュニケーションの問題はより難しい側面を含むことになる。多くの研究では、翻訳が言語学的な見地から考察されているが、本論文は文化論的な観点も含めてイソップ翻訳版を研究するものである。訳文の文体の違いは当時の社会背景と厳密な関係がある。それぞれがイソップにおける「西学東漸」のキャリアであり、文学作品にてイソップ東漸における異なる痕跡を残したのである。

全文を分析すると、『伊朔譯評』は『意拾喻言』を参照した可能性が高いと考えられる。内容の相違点は数多いが、全く同じところもある。『伊朔譯評』は全部整然とした四文字タイトルである。『意拾喻言』は二文字から五文字タイトルからなる。イソップ寓話の特徴として、『伊朔譯評』と『意拾喻言』の各寓話のタイトルは、動物談の特徴を持っている。擬人の描写手法で動物を比喩体にする話である。そして、全く同じタイトルと類似のタイトルが多い。両者を対比すると、82話からなる『意拾喻言』のなかで『伊朔譯評』と同じ、類似しているタイトルは合計67話がある。かくして、異なる時代に翻訳された『伊朔譯評』は『意拾喻言』との繋がりがあり、あるいは『意拾喻言』を踏襲した可能性が高いと言える。さらに、内容については『伊朔譯評』は白話の文体で量詞、四字熟語を活用し、西欧と中国のものを混ぜて寓話を構成した。『意拾喻言』は主に文言で古典や中国神話などを引用しつつイソップ寓話を翻訳した。寓話とは物語の内容が何らかの教訓やメッセージを持った文学である。主人公の感情や物語の背景を描写するとき、文学的な翻訳はいわゆる「異文化を自らで体験する」であろう。そして、教訓について、『伊朔譯評』は中国的そしてキリスト教的な言葉を共用するのに対して、『意拾喻言』

16) 戊戌の変法（ほじゅつへのんぼう）とは、中国清朝末期の1898年（光緒24年）に実行された、一連の政治改革の総称。明治維新と同様の立憲君主制による近代化革命（維新、上からの改革）を目指す変法自強運動の集大成にあたる。運動を担っていた康有為・梁啓超ら変法派の革命家たちと、彼らを受け容れた光緒帝によって、同年6月11日から改革が実行された。しかしながら、改革を嫌う西太后・袁世凱ら朝廷内の保守派が、同年9月21日にクーデター（戊戌の政変）を起こしたため、改革は強制的に中止された。実行された日数（103日間）の短さから「百日維新」とも呼ばれる。

17) 梁啓超（りょう けいちょう、1873年-1929年）は中国清末民初のジャーナリスト、革命家、政治家、思想家、歴史学者。字は卓如、号は任公、飲冰室主人など。さらに「中国之新民」など多数のペンネームをもつ。

は全くイソップを中国風に変容し中国特有なものを活用している。

以上、本稿の分析を通じ、『伊朔譯評』と『意拾喻言』は同じ話が多いことがわかったが、『伊朔譯評』には199話の中で本稿の「ア」「イ」「ウ」三つのデータ以外に、残り121話がある。残りの寓話についての分析は今後の課題になるが、『伊朔譯評』と『意拾喻言』は違う時代の作品としても、その内容を分析した上で前者は後者を踏襲し、引用した可能性が高いと判断される。漢訳イソップの領域で『伊朔譯評』は今まで研究されなかったため、本稿では『意拾喻言』との対比を行い、イソップにおける「西学東漸」を研究した。この研究方法は今後の研究にも参考となる分析法だと思われる。

